

未来忍者 慶雲機忍外伝 (1988)

メディア オリジナルビデオ

ジャンル SF アクション

製作国 日本

色彩 Color

時間 73分

TV放映 1988/12/02 ~

【解説】

“第一回 ナムコ オリジナル・ムービー”として、ゲームソフトメーカー・ナムコが制作したのが本作『未来忍者 慶雲機忍外伝』。監督は当時イラストレーターとして著名であった雨宮慶太。本作は雨宮の映画監督としての出世作の一つとして挙げる事が出来る。本作の舞台は、ハイテクノロジーが導入された戦国時代。中世日本文化とSFメカが奇妙に融合したパラレルワールドである。

時は慶雲元年。世界征服を企む悪霊“黒鷲”は、配下の妖術使い“雷鳴法師”に命じてサイボーグ忍者“機忍”を造らせて機忍軍団を組織し、諸国を侵略していた。機忍軍団の圧倒的な力の前には人間の兵士などはなすすべもなく、諏訪部家の軍勢は敗退してしまう。それから三年後、諏訪部は最後の反撃に出ようとしていた。超大型兵器“機動砲”を以て、黒鷲の本拠地“奇械ヶ城”を破壊しようというのだ。一方、黒鷲は、間近に迫った日蝕のエネルギーを利用して現世に実体化し、この世を支配しようとしていた。そのためには高貴な血筋の生贄が必要であり、それには諏訪部の当主“サキ姫”が最もふさわしい。機忍部隊に拉致されるサキ姫。諏訪部の家老はサキ姫救出の決死隊を奇械ヶ城に送り込む。

奇械ヶ城に忍び寄る一行の前に、一人の機忍“白怒火”が現れる。白怒火はもとは人間であり雷鳴法師の手によって機忍に改造されたのだが、近づく日蝕のエネルギーを受けて人間の頃の記憶を取り戻し、抜け忍となって独り黒鷲軍と戦っていたのだ。白怒火の目的は人間の身体を取り戻す事。白怒火の協力を受けて一行は黒鷲城に近づいていく。しかし彼らの前に立ちはだかる機忍軍団の侍大将“椽伎”。そして遂に日蝕の刻限が近づく。不気味な鳴動を始める奇械ヶ城。果たして彼らはサキ姫を救い出す事が出来るのか？

本作の魅力はまさに、ハイテクメカと戦国絵巻の融合した奇妙な世界観にあると言えよう。若いスタッフの情熱と雨宮慶太のイメージーションが産み出した自由奔放な小道具と映像が不思議な説得力を放っており、非常に楽しい作品に仕上がっている。また、三度笠風マスクや、稻荷神社のキツネ風クリーチャーなど、後に『ゼイラム』『ゼイラム2』に引き継がれる雨宮独特のモチーフが既にここで観られる事も要チェック。

ハイテクで味付けされた和風メカ群も非常に魅力的で、石垣造りの城壁をキャタピラで動かす移動要塞や、二本足で歩く神社型の歩行戦車などが、ミニチュアの精巧さもあいまって、迫力ある戦闘シーンを展開している。特筆すべきは光学合成の華やかさで、最終決戦などは小さなお子様は画面から離れて観る方がいいのでは、と思わせる程である。

物語の一方の主役となる機忍達も大活躍。黒鷲軍の下忍が掌から光線のように手裏剣を連続発射するシーンなど、魅力的なアイディアが山盛りである。また、残忍で強大な力を持つ椽伎と、椽伎配下の組頭達も、それぞれが個性的な姿で忘れられない。一方、それに対する白怒火は地味な姿ではあるが、それがかえって彼の秘められた悲しみと苦しみを強調し、正統派のヒーロー像を描き出しており非常に格好いい。アクション面も秀逸で、あくまでも日本独自のチャンバラではありながらも派手な光学合成とSF小道具で味付けされた大迫力の殺陣は、まさしく『未来忍者』という作品タイトルにふさわしいと言えよう。

【クレジット】

監督 雨宮慶太

原案 北原聡

脚本	雨宮慶太	
	北原聡	
	田中一	
撮影	大根田俊光	
美術	高橋昭彦	
音楽	太田浩一	
アクション	横山誠	
特技監督	佐川和夫	
特技・撮影	佐川和夫	
出演	森下恵理	サキ
	河井半兵衛	赤城
	井田弘樹	次郎丸
	牧冬吉	梶原三太夫
	伊藤聡	飛勇鶴／白怒火
	江森正明	黒鷲
	山本昌平	雷鳴法師
	吉田瑞穂	椽伎